令和六年度陸修偕行社慰霊祭の斎行

慰霊・援護委員会

はじめに

幸いにも桜の開花が遅れ、未だに多くの桜が残る中、令和6年4月17日午前10時30分より、令和六年度陸修偕行社慰霊祭が靖國神社にて斎行されました。偕行社として毎年実施していた市ヶ谷台慰霊祭及び月例参拝を統一して、明治の国軍創設後、国運を賭けての初の対外戦争・日清戦争終結の日である4月17日に慰霊祭を斎行することになってから通算3回目の慰霊祭です。本年4月1日に陸修偕行社が発足してからは、初めての慰霊祭になります。

慰霊祭に先立ち、市ヶ谷駐屯地慰霊碑地区において、陸修偕行社・火箱芳文理事長、ご遺族・阿南健太様及び中川聖様他、市ヶ谷台慰霊会会員の皆様が、陸軍大将・阿南惟幾茶毘の碑、陸軍元帥・杉山元及び陸軍大将・吉本貞一自決の碑、全陸軍航空部隊の碑、陸軍少佐・晴氣誠慰霊碑、そして自衛隊殉職隊員の碑に対して、万感の思いを込め献花・拝礼を実施いたました。

市ヶ谷台における献花・拝礼

令和六年度陸修偕行社慰霊祭の概要

慰霊祭斎行の目的は、「国家防衛のために尊い一命を捧げた陸・海軍将兵、更には戦争において国のために亡くなられた学徒、女子挺身隊員などの英霊を慰霊・顕彰し安らけく神鎮まらんことを祈念するとともに、感謝の念を捧げる」でありました。

来賓として、陸幕代表者、関係協力団体代表者、地方偕行会会長などをお迎えし、ご遺族、陸士・陸幼各期代表者、法人・個人賛助会員、普通会員・家族会員等が参加し、総参加者は約150名でした。慰霊祭参列者は、午前10時30に参集殿に集合、本年4月1日に就任された大塚海夫宮司のご挨拶を頂いた後、参集殿か

ら拝殿に参進、開式の辞、元海自東京音楽隊・堀田和夫様及びご息女の町ともみ様のトランペット演奏による国歌斉唱の後、修祓、献餞、祝詞奏上、陸修偕行社・火箱理事長による祭文奏上、続いてトランペットによる献奏で拝殿における儀式は終了しました。トランペットによる献奏は、奏者の堀田和夫様がアレンジした軍歌メドレー（「日本陸軍」・「暁に祈る」・「空の神兵」・「加藤隼戦闘隊」）、及び唱歌「ふるさと」の2曲。静寂の中に、時には皓皓と、またある時には杳杳と響き渡り慰霊祭が一層印象深いものとなりました。

この後、本殿に昇り、代表者による玉串奉奠に合わせて参列者全員が拝礼、最後に、トランペットの「国の鎮め」の演奏により黙祷、英霊の御霊に哀悼の誠を捧げました。

祭文を奏上する火箱理事長
（於：拝殿）

直会

拝殿及び本殿における慰霊祭斎行後、靖國会館に移動し直会を実施しました。コロナ禍により一昨年、昨年の慰霊祭での直会は見送っておりましたが、今回は久し振りの開催となりました。

今回の直会は、4月7日に靖國神社において斎行された第13回軍馬・軍犬・軍鳩合同慰霊祭の直会を兼ねており、同慰霊祭参列者6名の方々の参加を頂きました。戦場に斃れし軍馬・軍犬・軍鳩も広い意味では英霊であり、靖國の英霊と共に話題に上り、直会参加者との懇親を深めることができました。

新宮司の大塚海夫様におかれましては、拝殿集合時のご挨拶に続き、直会にもご参加頂き、冒頭にご挨拶を賜りますとともに、ご多用中にも拘わらず最後までお付き合いを頂き心から感謝・御礼申し上げます。

直会の式次第については、所用で拝殿及び本殿における慰霊祭に参加できずに直会から参加頂いた方、並びに軍馬・軍犬・軍鳩合同慰霊祭参加者で本直会に参加頂いた方もおられることから、今一度、トランペット演奏による国歌斉唱を実施後、初めに、陸修偕行社理事長・火箱芳文の挨拶、ご遺族代表・阿南建太様のご挨拶、続いて、ご来賓の靖國神社宮司・大塚海夫様及び「英霊にこたえる会」会長・古庄幸一様のご挨拶、来賓紹介、祭電披露と続きました。そして、「特攻隊戦没者慰霊顕彰会」理事長・岩﨑茂様の献杯により会食・懇談に入りました。会食・懇談は、終始、和気藹々の雰囲気で大いに盛り上がりました。最後に、トランペット演奏により「同期の桜」を全員で唱和して名残尽きない直会を終了しました。

大塚宮司のご挨拶（於：直会）

第3回偕行社慰霊祭・祭文

偕行社理事長・火箱芳文が奏上した祭文に陸修偕行社慰霊祭の趣旨、慰霊祭継続の強固な意思、偕行社を新生「陸修偕行社」として、陸自元幹部自衛官が受け継ぐ覚悟などが表明されていますので、長くなりますが全文を掲載いたします。

＊　＊　＊

祭文

【本日ここに、令和六年度陸修偕行社慰霊祭を、戊辰戦争以降の二四六万六千余柱の殉国者の御霊が祀られている靖國神社において、斎行するにあたり、ご参列の皆様を代表して、謹んで祭文を奏上いたします。

本日四月十七日は、明治維新以降近代国家として発展するわが国が、国軍創設後初めて国運を賭けて戦った対外戦争である日清戦争が、明治二十八年終結した日であります。爾来、日露戦争、第一次世界大戦・満洲事変・支那事変・大東亜戦争などの数次にわたる対外事変や戦争に際して「国家防衛のためにひたすら「国安かれ」の一念のもと、多くの陸・海軍将兵及び従軍看護婦、女学生、学徒など軍属・文官・民間の数多くの方々が、祖国の国体の護持と繁栄、そして安寧を希い、陸に海に、そして空において勇戦敢闘し、祖国のために殉じて逝かれ、また、国内にお

いても多くの方々が勤労動員中に軍需工場等でお亡くなりになられました。愛する家族を故国に残し北は酷寒不毛、南は酷暑瘴癘の異国の地、あるいは海洋で敢然と散って逝かれた方々、及び日本国の勝利を信じ不眠不休の勤労動員中に亡くなられた方々の無念さと、後に残されたご遺族の方々の深い悲しみに思いを致すとき、今なお万感胸に迫るものがあります。

今日、わが国が享受している民主主義国家としての平和と繁栄は、明治維新以降の国家存亡の危機に際して、「国体を護る志」を持って崇高な使命に殉ぜられた多くの方々の献身により築かれた礎の上にあると言っても過言ではありません。この平和と繁栄が恒久的に続くことを願って止みませんが、昨今のわが国を取り巻く安全保障環境は、いまだかってない極めて厳しい状況にあると認識せざるを得ません。そして、同じ「国を守る」という強い意思をもつ自衛隊は、憲法上の制約により、未だ軍隊としての地位を与えられておらず、そこから派生する多くの重要な課題を抱えてわが国防衛の任務を遂行せざるを得ません。また、先の大戦が終結してから長い歳月が流れ、今や戦後生まれの世代が国民の主力を占めるようになり、平和と繁栄に慣れるうちに、戦没者に対する敬意と慰霊の心が薄れつつあることが憂慮され、更に国のために尽くすという責任感の希薄化と国民道徳・道義の頽廃は大きな懸念であります。

このような状況の中で、偕行社は、本年四月一日、陸上自衛隊の幹部自衛官等退官者の会である「陸修会」との合同により、「陸修偕行社」となりました。陸修偕行社は、戦前の陸軍将校の皆様の御意志を受け継ぐ組織として、先人から託された歴史と伝統・文化に恵まれたこの素晴らしい国・日本の護持のため、諸課題の解決による安全保障体制の充実・発展に組織を上げて尽力するとともに、自衛隊、特に陸上自衛隊に対する必要な支援・協力を推進して行くことを御英霊の御前でお誓い申し上げます。また、陸修偕行社は、本日・四月十七日・日清戦争終結の日に、毎年、陸修偕行社慰霊祭を斎行して、これまでの偕行社の良き伝統と輝かしい事績を継承し、尊い一命をわが国のために捧げられた陸軍将兵を始めとする戦没者の慰霊・顕彰を引き続き行って参ります。さらに、国家としての英霊の慰霊顕彰のあり方は如何にあるべきかはもとより、今後、有事における任務遂行中に亡くなった場合の自衛官などの戦死者に対する慰霊・顕彰が、国家として相応姿で整斉と斎行されるよう提言していく所存であります。

「新たなる偕行の道　どこまでも
御霊とともに　吾は行くなり」

最後に、重ねて、国家のために尊い一命を捧げられた陸・海軍将兵、更には戦争において国の為に亡くなられた学徒、女子挺身隊員などの戦没者を慰霊顕彰し、安らけく神静まりますことを祈念するとともに、心からの感謝と敬意の念を捧げ、私どもになお一層のご加護とお導きを賜りますことを　冀って慰霊の言葉といたします。

令和六年四月十七日

公益財団法人　陸修偕行社

理事長　火箱芳文【

＊　＊　＊

終わりに

一昨年の第1回偕行社慰霊祭斎行から通算3回目となる令和六年度陸修偕行社慰霊祭は、厳粛且つ荘厳に滞りなく斎行されました。斎行に際し、ご支援を頂いた靖國神社、陸修偕行社事務局及び会員勤務員の皆様、そしてご多用中にも拘わらず参列を頂いた皆様にこの場を借りて深甚なる感謝の意を表します。

偕行社は、本年4月1日に、陸上自衛隊幹部退官者の会・陸修会と合同し、「陸修偕行社」として新たな第一歩を踏み出しました。今後、毎年4月17日に「陸修偕行社慰霊祭」として慰霊祭を斎行いたしますので多くの皆様のご参列を心からお待ちしております。

（文責：慰霊援護委員長
平野治征　陸自77）

広告目次

㈱セレモア……表紙4
㈱東京都民互助会……表紙4
㈱全国儀式サービス……17
㈱住販……29
㈱和泉家石材店……40
㈱武蔵富装……42
信和株式会社……42

本誌へ広告掲載をご希望の方は、事務局へご用命下さい。